

パンデミック砲を発射して遊ぶ WHO

The WHO Plays with Pandemic Fire

The Continuing Saga of the Flying Pigs Pandemic Flu



F・ウィリアム・イングドール

(翻訳：為清勝彦)

By F. William Engdahl

(Japanese translation by Katsuhiko Tamekiyo)

2009年6月5日

世界の健康に対する脅威を監視する国連機関であると思われているジュネーブの WHO 内部からの情報によると、マーガレット・チャン事務局長は近々公式にパンデミック（フェーズ 6）を宣言する予定である。もしも本当に宣言するならば、この奇妙な行動は、今まで最多の H1N1 の疑いのある症例数を報告している国、つまり米国が、新しい症例の報告を自由裁量で中止してしまったのと時を同じくすることになる。

もしもタミフルのようにインフルエンザを予防することも症状を軽くすることもないが、非常に有毒で深刻な麻痺状態^{まひ}や呼吸障害、最悪の場合死に至ることもある薬を服用する恐怖を家族に味わわせるつもりであれば、まずは事実を知ってからにすべきだろう。

今日まで WHO に報告された世界中の感染の勢いが極めて安定しており、平年のインフルエンザと変わらない状態である中で、WHO がいまにもパンデミック警告を世界に宣言するかもしれないとは、非常におかしなことだ。

豚インフルエンザ（変更前の名前を使うが）のせいで死亡したと言われていた数少ない事例も、H1N1 が原因ということには一切なっていない。5月28日の記者会見で CDC は「死者については、これまで報告のあった 12 名の内 11 名について情報を得ています。そして死亡者の内、10

名は基礎疾患を持っていた人でインフルエンザとの合併症で重症化するリスクが高い人たちでした」と述べた。これこそが伝染病学者が「因果関係」ではなく「相関関係」と呼んでいるものであり、日和見感染による死亡と言っているものだ。

ヨーロッパの伝染病学者は、個人的には、A(H1N1)型インフルエンザの病気とされているものと死亡を結びつける証拠はないと思っており、どちらかといえば死亡は「偶然の一致」か医療の専門用語で日和見感染といわれるものだと考えている。CDCの報告はこの見解を補強することになりそうだ。

米国 CDC が定期報告を中止する？

「全人類への脅威」であるはずのパンデミックにしては非常に奇妙なことに、今までのところ「確認済み」の症例に「たぶん」H1N1の症例を含め、最大の症例数を報告している国の監督官庁が、つまり米国の CDC が、先述の 5 月 28 日の記者会見のついでに「来週から、スケジュールを変更します。症例数の情報の更新頻度を落とします」と言ったのである。この発表をしたのは、CDC の科学公衆衛生プログラム副長アン・シュチャット (Anne Schuchat) 博士である。「頻度を落とす」とは具体的に何かについては説明がなく、H1N1 ワクチンの製造のため米国政府が何十億ドルという緊急資金を製薬会社に奉納している最中というのに何故そのような決定をしたのかについてもコメントを避けた。

いや、しかし待てよ！ そういえば我々は世界的なパンデミックの緊急事態になるかならないかの崖っぷちでシーソーに乗っていたのではなかったか。フェイズ 6 になれば、旅行は制限され、検疫・隔離が強制実施され、もろもろの非常手段が実施されることになる。そんな状況だというのに、豚インフル H1N1 の全報告症例数の 67% も占める国の責任ある組織が、今後はさほど頻繁に報告しないわよと、ついでにさり気なく言うものだろうか？

ますます奇妙さを増してくる状況の中で、もう一つのおかしな事件は、2009 年 4 月 20 日に WHO の新しいパンデミック基準が発表されたことである。現在のパンデミック恐怖に適用するのにちょうど間に合う最高のタイミングだ。この件を担当している WHO の職員によれば、2005 年版のパンデミック基準の改訂作業は、「メキシコでの初のインフルエンザ症例が報告されるずっと前から」始まっていた。これはオフレコで聞いた話だ。

更におかしなこととして、最新の 2009 年 4 月の WHO パンデミック対応基準では、フェイズ 5 (準パンデミック) とフェイズ 6 (いわゆるパンデミック) に対しては、まったく同じ対処をすることになっている。その対処とは「それぞれの国の計画で求められる行動を実施する」であるが、そんなことのために WHO が必要なのだろうか？

準備を進める巨大医薬品会社

タミフルのような抗ウイルス薬やワクチンの製造を始めるのに必要なサンプルを CDC から受け取ると、巨大製薬会社にとっては黄金の^か搔き入れ時が近づいてくる。

サノフィ・アベンティス、グラクソスミスクラインのような大ワクチン・メーカーが新型ワクチンを生産する体制を整えるために最近になって米国政府は 10 億ドルを準備した。この群れを先導するのは連邦から 2 億 8 千 9 百万ドルの支援を受けるノバルティス、その次に 1 億 9 千百万ドルのサノフィ・アベンティス、そして 1 億 8 千百万ドルを得たグラクソスミスクラインと続く。更に追加で米国政府はワクチン生産を「無リスク」化することを決定した。おそらく新型ワクチンには通常の保障条項を撤廃することになる。米国の保健福祉省 (HHS) は、決してパンデミックではなかった H5N1 鳥インフルエンザのためにパンデミック・ワクチンを生産する契約を既に締結していたメーカーに発注を行っている。2005 年以降、鳥インフルエンザと闘うためのワクチンを開発・製造・備蓄するために 30 億ドル以上の連邦の資金が費やされた。どれぐらいの期間、そのようなワクチンは在庫にあるのだろうか？



WHO と CDC によって拡大された全体的にワケのわからない性質の「空飛ぶ豚」パニックにふさわしく、CDC は最初の H1N1 ワクチンの認可をハロウィン (10 月末) までに実現したいと思っている。トリック・オア・トリート！ (何かくれないと、悪さするよ！)

オーストラリア政府は、CSL (連邦血清研究所) が開発する新型ワクチンを 1 千万本注文した。CSL は人体実験が可能になればその数日以内に新ワクチンの製造を開始する予定である。カリフォルニアのウイルス株に基づいたワクチンはフェレットを使って動物実験されている。中国は 6 月までに豚インフルエンザのサンプルを入手するつもりで、7 月には新しい A(H1N1) 型ワクチンの製造を始める計画である。

競って市場に出品する製薬会社たちは、新型ワクチンを製造するために遺伝子操作の技術を

使っている。メリーランド州の製薬会社ノババックスは、今回の豚インフル騒ぎまでは毎年損失を出して大変な状態であったそうだが、現在は H1N1 インフルエンザにピッタリと言いながら遺伝子組み換えワクチンを準備している。

失敗した 1976 年の豚インフルエンザ

いったん WHO がフェイズ 6 パンデミック警告を宣言したならば、政府も民衆もパニックになり地獄のような大混乱となって、海外旅行の中止、国内旅行の制限、その他、戒厳令のような緊急手段がとられるかもしれない。

1976 年、ジェラルド・フォード大統領は、フォートディックス軍事基地で豚インフルエンザ発生の疑いがあるということで、全ての男女・子供にワクチンを接種するよう大統領命令を発した。何のパンデミックも現れなかったにもかかわらず、数ヶ月以内に 4 千万人（当時の人口の約 2 割）の無知なアメリカ人がワクチンを受けた。インフルエンザはフォートディックスに限定されていた。

おかしなことに、フォートディックスの過酷な気候と過密な兵舎の環境は問題にされず、全ての新兵は決まりとして即座に複数回のワクチン接種を受けさせられた。現在、イラクやアフガニスタンに出発する前に予防接種するのと似ている。1918 年にスペイン風邪（これは間違った名称だ）が流行したときに米国とヨーロッパの兵士が予防接種を受けたのと同じだともいえる。フォートディックスでの病気の流行と一人の死亡は、ワクチン接種が原因だったのか？ どの政府機関もこの問題を追求する気がないため、真相を知ることはないだろう。

この 1976 年の米国で起きた豚インフルエンザ・パニックは、再選されるのに必死で神経質になっていた大統領に支えられ、結果として 30 人がワクチンの有害反応で死亡し、何百人とまでいかなくとも何十人もがギラン・バレー症候群という奇病にかかったため、最初からそもそも存在しなかったパンデミックのために実施されていた国家的なワクチン接種は中止になった。

法的責任からの自由？

しかしながら、1976 年と今日では極めて大きな違いが一つある。1976 年の場合、米国の保険会社は、ワクチンによる病気や死亡でワクチン・メーカーが訴訟されるリスクに対する保険の引き受けを拒否した。今は、製薬会社は、製造物責任訴訟による損害を恐れる必要はほとんど無い。FDA（米国食品医薬品局）に任された通りに、どんな物質を解き放っても大丈夫であり、パンデミック宣言下では、なるべく多くの人々にワクチンを突き刺すべく突撃するため、安全基準などおかないしになるだろう。

ブッシュ政権のときにできた決まりで、ワクチンは「不可避免的に安全でない」という表示をしてよいことになった。これは、製品は「慎重に設計され、製造され、販売されるが、それでも危険である。欠陥商品ではないが、それでも害を及ぼすことがあるかも」という意味であるが、理解可能だろうか？ 医薬品業界にとっては明確であるに違いない。この決まりをつくるために一所懸命に政界に働きかけたのだから。

薬品業界にとって決定的な勝利が2006年1月に訪れた。ブッシュ政権の保健福祉省 (HHS) 長官マイケル・リービット (Michael Leavitt) が、歴史的に確立されていた判例と議会が表明した意向を公然と無視した新しい決まりを発表したのである。新しいFDAの規則は、国民が安全性に問題のある薬を製造した製薬会社を訴えることを認める法律を州が制定できないように牽制した。^{けんせい} その怪しい理屈として、FDAはHHSの下部機関であり、薬品の安全検査に国家的な責任を負っている。州レベルの訴訟はこの国家的な責任に抵触するというのだ。当時、何人かの議員が指摘した通り、バイオックス事件のように明らかに危険な薬に対してFDAが迅速に対処したか過去の実績を見ると、薬の副作用で不必要な心臓発作に苦しんだり命を落とす国民の健康と生活にほとんど役立っていない。

2006年にFDAが法的責任を無くす決定をしたときに反対した民主党議員は、ワクチン・メーカーのタダ乗り状態を変える予定があるのか、質問してみると良いかもしれない。それこそが豚インフルエンザの影響を避けるために最も効果的である。そして人々は本当の豚の危険はどこにあるか気付くかもしれない。

元記事 The WHO Plays with Pandemic Fire, The Continuing Saga of the Flying Pigs Pandemic Flu
by F. William Engdahl (URL <http://www.engdahl.oilgeopolitics.net/>)

Global Research, June 5, 2009

<http://www.globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=13856>

© F. William Engdahl, Global Research, 2009

この記事は、著者F・ウィリアム・イングドール氏のご好意により日本語訳と公開の許可を頂いたものです。
This is the translation of the article by the author F.William Engdahl and presented to the public owing to his kindness.